

ふるさとのお話

浮島沼の 沼のばんばあ



後藤信夫さん

浮島沼が広々とした大沼だったころ、夕方から夜にかけて低く太い、うめき声が沼のどこからともなくきこえました。これを沼の周辺の人たちは、「沼のばんばあ」と呼んでおそれていました。

大雨で家が流される

昔々、浮島村にかわいい子ども連れのおばあさんがやってきました。

おばあさんは、村人から物をもらいながら、暮らしを立てていました。

村人は、かわいい子どもに同情して物を与えていましたが、たび重なるにつれてけげらいするようになり、そこで、おばあさんは、人里はなれた沼のほとりに住むことにしました。そして、長雨の続いたある年の6月、特にひどくふった雨のため、おばあさんの家は、一晩のうちに流されてしまいました。

流れはどんどん早くなり、子どもの姿も見えなくなりました。

おばあさんは、流されながらも子どもの安否を気づかい「ポー、ポー」と子どもを呼びつづけました。でも返事はありません。そして、大きなうねりにのまれ、子どもも、おばあさんも、とうとう死んでしまいました。それからというもの、夜になるとおばあさんが子どもを呼んだ、「ポー、ポー」という声が沼から聞こえるので、村人たちは、「沼のばんばあ」と呼び、おそれていました。

西船津に住む後藤信夫さん(86歳)は、この話は、ずいぶん古い話で子どもが泣きやまない時など、「沼のばんばあが来るぞ」とおどし文句として使ってたね。だけど、もう知っている人は、ほとんどいないじゃないかね……。わしゃあ、あのきみ悪い声の正体は、食用カエルの鳴声じゃないかと思うがね……。と語ってくれました。

室町時代には今井村や間門村あるいは桑崎村などを含めた地域を「今井郷」と呼んでいたし、太平記にも「今井見付」とあるので、今井村は早くから成立していた村だということがわかります。奈良時代の始め頃、僧玄昉が砂山地区に行住寺を建てたとき、ふるさとの今井という地名を、そのままつけたのかも知れません。

地名の由来

今井(元吉原)



室町時代には今井村や間門村あるいは桑崎村などを含めた地域を「今井郷」と呼んでいたし、太平記にも「今井見付」とあるので、今井村は早くから成立していた村だということがわかります。

奈良時代の始め頃、僧玄昉が砂山地区に行住寺を建てたとき、ふるさとの今井という地名を、そのままつけたのかも知れません。

古墳のはなし



③

古墳と祖先の生活



須津の千人塚古墳

古墳を造る場所は？

増川の「浅間古墳」は、尾根の先端部分、須津の「千人塚古墳」や船津の「稲荷塚古墳」は谷の川沿いの緩やかな斜面にあります。このことから、葬られた人が生前支配していた所が見え、さらに畑などに適さない荒地に多く造られたことがわかります。しかし、伝法の「伊勢塚古墳」のように、平地の部落近くに造られたものもあります。

愛鷹山の南側に多くの古墳が見られますが、これは古墳時代愛鷹山の南側に浮島沼が広がっていたため、その周辺にはたくさんのお水田が拓けていました。

このため、ここに多くの古墳が造られました。

また、古墳が山の中までであるため、現在まで壊されずに残っていたものも多くあります。

こちら編集室

入学、就職シーズン。それぞれ、希望に胸をふくらませ、学校や職場へ通っていることでしょう。

編集室にも、ウン10年前の自分をなつかしんでいる人も…でも、「締切日がせまっているよ」の一声に、あたふたと取材にでかけました。